

演題 1

歯列評価の重要性と「とろみ水」による早期介入の有用性の提案

～オーラルフレイル・口腔機能低下による摂食嚥下障害の実態調査より～

¹⁾ 公益財団法人 豊郷病院リハビリテーション科, ²⁾ 同 歯科口腔外科,

³⁾ 滋賀医科大学医学部 歯科口腔外科学講座

○戸田兼輔¹⁾, 藤原宏実¹⁾, 木村喜久子²⁾, 鈴木百美子²⁾, 町田好聡³⁾

【目的】超高齢化社会を迎え、高齢者に対する適切な嚥下評価と食の提供が求められている。他方、嚥下障害を抱える高齢者は、必ずしも適切な嚥下機能評価がなされているとは限らず、不適切な食形態が提供されていることも少なくないと思われる。

このような背景の中、明らかな嚥下障害を来す既往がなく、オーラルフレイルや口腔運動機能低下に該当する高齢者が、誤嚥性肺炎や低栄養、脱水症などで緊急入院してくるケースが増加してきている。

そこで、当院では誤嚥性肺炎の要因を探るため、歯科口腔外科と共に歯牙欠損や義歯の適合性などの歯列状態と、嚥下機能を合わせて評価してきた。また、直接訓練で使用する食材として「とろみ水」を用いた結果、早期から経口摂取が可能となり効果が認められたため報告する。

【方法】対象は2014年4月から2017年3月迄の3年間で、誤嚥性肺炎にて当院に入院した患者のうち、中枢性および末梢性運動障害を来す疾患を認めず、1週間以上絶食期間が続いた109名（男性:56名,女性:53名,平均年齢83.7歳）。評価項目は、歯列状態や義歯の適合性を評価し、口腔運動機能は運動能力と嚥下反射の有無を評価した。評価基準は、日本老年歯科学会によるオーラルフレイル（以下フレイル）口腔機能低下（以下機能低下）の判定基準を用いた。歯列評価の有用については、歯列状態の良と不良、口腔機能はフレイルと機能低下の組み合わせにより、訓練後に経口摂取が可能となったかどうかで χ^2 乗検定を行った（有意水準： $p<0.05$ ）。また、とろみ水による早期介

入の有用性については、とろみ水とゼリーの嚥下状態を比較した。

【結果および考察】歯列評価の有用性について、歯列良好とフレイルの組み合わせでは7名中7名すべてが経口摂取可能となり、歯列良好と機能低下の組み合わせでは37名中15名が経口摂取可能、歯列不良とフレイルの組み合わせでは12名中9名が経口摂取可能、歯列不良と機能低下の組み合わせでは53名中32名が経口摂取可能となり、歯列良好とフレイルの組み合わせが統計的に有意に多い改善、歯列良好と機能低下の組み合わせが有意に少ない改善となった（ $p<0.05$ ）。このことから、歯列の状態も回復に影響を与えることがわかり、歯列評価の有用性が示された。

とろみ水の有用性について、歯列不良に該当したほとんどの患者は、ゼリーでは丸飲みや保持困難で誤嚥していたが、粘度調整したとろみ水では誤嚥を認めなかった。これは、ゼリー食では粘性が低いため舌背に留まりにくいだが、とろみ水では、適度な粘性を作ることが可能であり、口腔保持がしやすくなるため誤嚥しにくいと考えられ、早期からの直接嚥下訓練に適切な食材と思われる。

これらより、オーラルフレイルや嚥下機能が低下した高齢者に、歯牙欠損や義歯不適合が生じると、舌の安定性や巧緻性がさらに低下し、準備期や口腔期の障害がより強くなっていると推測でき、嚥下評価では、嚥下機能のみならず歯列状態の評価も重要であること、および早期介入の訓練食として「とろみ水」の有用性が示唆された。